

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	彦坂 眞一郎
主な担当科目	室内楽Ⅰ,室内楽Ⅰ①,室内楽Ⅰ②,室内楽Ⅱ,室内楽Ⅱ①,室内楽演習Ⅱ,実技個人レッスン[器楽Ⅰ①,器楽Ⅰ②,器楽Ⅰ④,器楽実技Ⅰ②,器楽実技Ⅱ②]
シラバス	次ページをご参照ください
2022年の教育目標・授業に臨む姿勢	私は専任就任初年度であるため、本学がどのような大学であるか知ることを第一と考え、全体を広く観察し認識を深めるよう務めた。加えて、私の専門分野である演奏実技系の指導では、学生の知識を増やすことを主眼とせず、集中力を持って身体を感じ、操作すること(奏法)を一貫して指導した。
2022年の教育に関する自己評価	本学がどのような大学であるか、どのような役割の部署によって構成され日々動いているかという私の理解は、ようやく入り口にたどり着いたという程度で、まだまだ組織の役に立つ人材には程遠い状況だと感じている。 一方、レッスンや実技系の授業においての私の指導は多くの学生に受け入れられ、一人ひとりの進歩に影響を与えているという実感を得ている。
2022年のFD活動に関する自己評価	基本的に演奏家やその指導者を育成することを目的とする場合、レッスンや授業ごとに予め何を教えるべきかを決めておく、いわゆる授業計画なるものはそれほど重要ではなく、決めてしまえばかえって不効率であると考えている。つまり私達教員に必要なのは対機説法的能力だと考えており、その意味で私の指導はうまく行っていると思っている。
授業改善のために取り入れた研修内容	特に多様な背景を持つ学生への対応について研修会で行ったグループディスカッションでは、参考になるお話を聞くことができました。特に外国人留学生への対応については、その著しい演奏能力の低さにより、想定していたレッスン内容にこだわることなく、各学生に理解できるレベルに内容を引き下げることに躊躇がなくなった。喜ばしいことではないが、学生にとっては必要なことだと前向きになることができた。

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		
演習	2～	前期	1	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰは、演奏家コースの2年目または弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部2年生以上が初めて室内楽を履修する場合の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）
第3回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）
第6回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編
第7回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編
第8回	アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）
第9回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編
第10回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編
第11回	アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第12回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編
第13回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編
第14回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習
第15回	前期のまとめ
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時限に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ

B

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	前期	1		0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰは、演奏家コースの2年目または弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部2年生以上が初めて室内楽を履修する場合の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）
第3回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）
第6回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編
第7回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編
第8回	アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）
第9回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編
第10回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編
第11回	アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第12回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編
第13回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編
第14回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習
第15回	前期のまとめ
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽 I

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	前期	1	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽 I は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの短大2年生以上が初めて室内楽を履修する場合の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回 前期オリエンテーション

第2回 アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）

第3回 アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編

第4回 アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編

第5回 アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）

第6回 アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編

第7回 アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編

第8回 アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）

第9回 アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編

第10回 アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編

第11回 アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）

第12回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編

第13回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編

第14回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習

第15回 前期のまとめ

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	前期	1	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰは、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの短大2年生以上が初めて室内楽を履修する場合の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

- 第1回 前期オリエンテーション
- 第2回 アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）
- 第3回 アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編
- 第4回 アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編
- 第5回 アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）
- 第6回 アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編
- 第7回 アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編
- 第8回 アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）
- 第9回 アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編
- 第10回 アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編
- 第11回 アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）
- 第12回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編
- 第13回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編
- 第14回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習
- 第15回 前期のまとめ
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回
- 第26回
- 第27回
- 第28回
- 第29回
- 第30回

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ①

サクソフォンA

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	通年	2		0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ①は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部2年生以上が初めて室内楽を履修する場合の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる“クアルテット”の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）
第3回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）
第6回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編
第7回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編
第8回	アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）
第9回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編
第10回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編
第11回	アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第12回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編
第13回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編
第14回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）
第18回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編
第19回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編
第20回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習
第21回	アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）
第22回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：基礎編
第23回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：応用編
第24回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：より高度な実習
第25回	アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かりレベルの向上を目指す）
第26回	アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：基礎編
第27回	アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：応用編
第28回	アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：基礎編
第29回	アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：応用編
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必ず持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時限に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ①

サクソフォンC

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	2～	通年	2		0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ①は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部2年生以上が初めて室内楽を履修する場合の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる“クアルテット”の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）
第3回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）
第6回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編
第7回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編
第8回	アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）
第9回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編
第10回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編
第11回	アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第12回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編
第13回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編
第14回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）
第18回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編
第19回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編
第20回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習
第21回	アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）
第22回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：基礎編
第23回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：応用編
第24回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：より高度な実習
第25回	アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かりレベルの向上を目指す）
第26回	アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：基礎編
第27回	アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：応用編
第28回	アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：基礎編
第29回	アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：応用編
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必ず持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ①

サクソフォンA(弦管打演奏家Ⅰ)

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	1～	通年	2	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ①(弦管打演奏家Ⅰ)は、弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が1年次から選択履修出来る「室内楽」を学修するための授業です。室内楽という演奏形態においては個々のパートの完成度に非常に高度なものが要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより、各自の音楽上の係わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成して、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる編成である四重奏を中心に学修します。演奏家Ⅰコース、演奏家Ⅱコースの学生によってメンバーを構成し(学年の枠を超えて組むことを推奨しています)より難易度の高い作品、高度な技術、高度なアンサンブルを学修することができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：基礎編
第3回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：応用編
第4回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：基礎編
第5回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：応用編
第6回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：基礎編
第7回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：応用編
第8回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：基礎編
第9回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：応用編
第10回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：基礎編
第11回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：応用編
第12回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：基礎編
第13回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編①
第14回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編②(展開)
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：基礎編
第18回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：応用編
第19回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：基礎編
第20回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編①
第21回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編②(展開)
第22回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：基礎編
第23回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編①
第24回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編②(展開)
第25回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編③(まとめ)
第26回	アンサンブル実習：レパートリー研究：I.ゴトコフスキー《四重奏曲》など
第27回	アンサンブル実習：レパートリー研究：A.ベルノー《四重奏曲》など
第28回	アンサンブル実習：レパートリー研究：長生淳《四重奏曲》など
第29回	アンサンブル実習：レパートリー研究：T.エスケシュ《タンゴ・ヴィルトゥオジテ》など
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も大切な学修の時間であることを意識しましょう。

同時限に履修登録していれば学年の枠を超えて編成することを推奨します。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ①

サクソフォンC(弦管打演奏家Ⅰ)

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
演習	1～	通年	2	定期試験	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ①(弦管打演奏家Ⅰ)は、弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が1年次から選択履修出来る「室内楽」を学修するための授業です。室内楽という演奏形態においては個々のパートの完成度に非常に高度なものが要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより、各自の音楽上の係わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成して、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる編成である四重奏を中心に学修します。演奏家Ⅰコース、演奏家Ⅱコースの学生によってメンバーを構成し(学年の枠を超えて組むことを推奨しています)より難易度の高い作品、高度な技術、高度なアンサンブルを学修することができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：基礎編
第3回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：応用編
第4回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：基礎編
第5回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：応用編
第6回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：基礎編
第7回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：応用編
第8回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：基礎編
第9回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：応用編
第10回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：基礎編
第11回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：応用編
第12回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：基礎編
第13回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編①
第14回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編②(展開)
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：基礎編
第18回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：応用編
第19回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：基礎編
第20回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編①
第21回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編②(展開)
第22回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：基礎編
第23回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編①
第24回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編②(展開)
第25回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編③(まとめ)
第26回	アンサンブル実習：レパートリー研究：I.ゴトコフスキー《四重奏曲》など
第27回	アンサンブル実習：レパートリー研究：A.ベルノー《四重奏曲》など
第28回	アンサンブル実習：レパートリー研究：長生淳《四重奏曲》など
第29回	アンサンブル実習：レパートリー研究：T.エスケシュ《タンゴ・ヴィルトゥオジテ》など
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も大切な学修の時間であることを意識しましょう。

同時限に履修登録していれば学年の枠を超えて編成することを推奨します。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ②

サクソフォンA

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
演習	3～	通年	2	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ②は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部3年生以上で、既に室内楽Ⅰ①を前年度までに終えた学生が履修する室内楽の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる“クアルテット”の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）
第3回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）
第6回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編
第7回	アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編
第8回	アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）
第9回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編
第10回	アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編
第11回	アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第12回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編
第13回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編
第14回	アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）
第18回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編
第19回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編
第20回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習
第21回	アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）
第22回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：基礎編
第23回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：応用編
第24回	アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：より高度な実習
第25回	アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かりレベルの向上を目指す）
第26回	アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：基礎編
第27回	アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：応用編
第28回	アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：基礎編
第29回	アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：応用編
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必ず持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ②

サクソフォンC

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
演習	3～	通年	2	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ②は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部3年生以上で、既に室内楽Ⅰ①を前年度までに終えた学生が履修する室内楽の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる“クアルテット”の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回 前期オリエンテーション

第2回 アンサンブル実習（ベーシックな作品を中心に学修する）

第3回 アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：基礎編

第4回 アンサンブル実習（サンジュレー、ジャンジャン作品など）：応用編

第5回 アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程や和声感を理解して演奏する）

第6回 アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：基礎編

第7回 アンサンブル実習（パスカル、ランティエ作品など）：応用編

第8回 アンサンブル実習（作品の音楽的な理解を深める）

第9回 アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：基礎編

第10回 アンサンブル実習（ボザ、デュボア作品など）：応用編

第11回 アンサンブル実習（編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく）

第12回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：基礎編

第13回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：応用編

第14回 アンサンブル実習（フランセ、リヴィエ作品など）：より高度な実習

第15回 前期のまとめ

第16回 後期オリエンテーション

第17回 アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）

第18回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編

第19回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編

第20回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習

第21回 アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）

第22回 アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：基礎編

第23回 アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：応用編

第24回 アンサンブル実習（ビエルネ、デザンクロ作品など）：より高度な実習

第25回 アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かりレベルの向上を目指す）

第26回 アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：基礎編

第27回 アンサンブル実習（ゴトコフスキー、長生作品など）：応用編

第28回 アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：基礎編

第29回 アンサンブル実習（ベルノー、シュミット作品など）：応用編

第30回 1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必ず持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ②

サクソフォンA(弦管打演奏家Ⅰ)

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
演習	2～	通年	2		0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ②(弦管打演奏家Ⅰ)は、既に室内楽Ⅰ①(弦管打演奏家Ⅰ)を前年度までに履修し終えた弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が選択履修出来る授業です。室内楽という演奏形態においては個々のパートの完成度に非常に高度なものが要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより、各自の音楽上の係わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成して、各グループ単位で授業を進めていきます。昨年度の学びを生かし、さらなるアンサンブル能力の向上を目指します。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる編成である四重奏を中心に学修します。演奏家Ⅰコース、演奏家Ⅱコースの学生によってメンバーを構成し(学年の枠を超えて組むことを推奨しています)、さらに難易度の高い作品、高度な技術、高度なアンサンブルを学修することができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：基礎編
第3回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：応用編
第4回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：基礎編
第5回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：応用編
第6回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：基礎編
第7回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：応用編
第8回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：基礎編
第9回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：応用編
第10回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：基礎編
第11回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：応用編
第12回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：基礎編
第13回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編①
第14回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編②(展開)
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：基礎編
第18回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：応用編
第19回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：基礎編
第20回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編①
第21回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編②(展開)
第22回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：基礎編
第23回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編①
第24回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編②(展開)
第25回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編③(まとめ)
第26回	アンサンブル実習：レパートリー研究：I.ゴトコフスキー《四重奏曲》など
第27回	アンサンブル実習：レパートリー研究：A.ベルノー《四重奏曲》など
第28回	アンサンブル実習：レパートリー研究：長生淳《四重奏曲》など
第29回	アンサンブル実習：レパートリー研究：T.エスケシュ《タンゴ・ヴィルトゥオジテ》など
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も大切な学修の時間であることを意識しましょう。

同時限に履修登録していれば学年の枠を超えて編成することを推奨します。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅰ②

サクソフォンC(弦管打演奏家Ⅰ)

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
演習	2～	通年	2	定期試験	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅰ②(弦管打演奏家Ⅰ)は、既に室内楽Ⅰ①(弦管打演奏家Ⅰ)を前年度までに履修し終えた弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が選択履修出来る授業です。室内楽という演奏形態においては個々のパートの完成度に非常に高度なものが要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより、各自の音楽上の係わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成して、各グループ単位で授業を進めていきます。昨年度の学びを生かし、さらなるアンサンブル能力の向上を目指します。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる編成である四重奏を中心に学修します。演奏家Ⅰコース、演奏家Ⅱコースの学生によってメンバーを構成し(学年の枠を超えて組むことを推奨しています)、さらに難易度の高い作品、高度な技術、高度なアンサンブルを学修することができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：基礎編
第3回	アンサンブル実習：J.リヴェエ《グラヴェとプレスト》などテクニカルなスタンダード・レパートリー：応用編
第4回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：基礎編
第5回	アンサンブル実習：G.ビエルネ《民謡風ロンドの主題による序奏と変奏》など(アンサンブルの中での音程やハーモニーを理解して演奏する)：応用編
第6回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：基礎編
第7回	アンサンブル実習：J.リュエフ《四重奏のためのコンセル》など(作品の構造・構成を理解する)：応用編
第8回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：基礎編
第9回	アンサンブル実習：C.バスカル《四重奏曲》など(作品の音楽的な理解を深める)：応用編
第10回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：基礎編
第11回	アンサンブル実習：G.ラクール《四重奏曲》など(個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく)：応用編
第12回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：基礎編
第13回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編①
第14回	アンサンブル実習：A.デザンクロ《四重奏曲》など(和声法や対位法を理解して演奏する)：応用編②(展開)
第15回	前期のまとめ
第16回	後期オリエンテーション
第17回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：基礎編
第18回	アンサンブル実習：J.S.バッハ《イタリア協奏曲》など(バロック作品に取り組み、時代様式などについて理解する)：応用編
第19回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：基礎編
第20回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編①
第21回	アンサンブル実習：A.グラズノフ《四重奏曲》など(ロマン派的な作品に取り組み、スタイルなどについて理解する)：応用編②(展開)
第22回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：基礎編
第23回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編①
第24回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編②(展開)
第25回	アンサンブル実習：F.シュミット《四重奏曲》など(正確な演奏だけに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す)：応用編③(まとめ)
第26回	アンサンブル実習：レパートリー研究：I.ゴトコフスキー《四重奏曲》など
第27回	アンサンブル実習：レパートリー研究：A.ベルノー《四重奏曲》など
第28回	アンサンブル実習：レパートリー研究：長生淳《四重奏曲》など
第29回	アンサンブル実習：レパートリー研究：T.エスケシュ《タンゴ・ヴィルトゥオジテ》など
第30回	1年のまとめ

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も大切な学修の時間であることを意識しましょう。

同時限に履修登録していれば学年の枠を超えて編成することを推奨します。また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅱ

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
演習	2～	後期	1	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽Ⅱは、演奏家コースの2年目または弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部2年生以上が初めて室内楽を履修する年の後期開講の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	後期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）
第3回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習
第6回	アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）
第7回	アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：基礎編
第8回	アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：応用編
第9回	アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：より高度な実習
第10回	アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かり、レベルの向上を目指す）
第11回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：基礎編
第12回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：応用編
第13回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：より高度な実習
第14回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：まとめ
第15回	1年のまとめ
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽 II

A

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
演習	2～	後期	1	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽 II は、演奏家コースの2年目または弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの学部2年生以上が初めて室内楽を履修する年の後期開講の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回	後期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）
第3回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編
第4回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編
第5回	アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習
第6回	アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）
第7回	アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：基礎編
第8回	アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：応用編
第9回	アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：より高度な実習
第10回	アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かり、レベルの向上を目指す）
第11回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：基礎編
第12回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：応用編
第13回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：より高度な実習
第14回	アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：まとめ
第15回	1年のまとめ
第16回	
第17回	
第18回	
第19回	
第20回	
第21回	
第22回	
第23回	
第24回	
第25回	
第26回	
第27回	
第28回	
第29回	
第30回	

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽 II

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	2～	後期	1	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽 II は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの短大 2 年生以上が初めて室内楽を履修する年の後期開講の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回 後期オリエンテーション

第2回 アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）

第3回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編

第4回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編

第5回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習

第6回 アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）

第7回 アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：基礎編

第8回 アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：応用編

第9回 アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：より高度な実習

第10回 アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かり、レベルの向上を目指す）

第11回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：基礎編

第12回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：応用編

第13回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：より高度な実習

第14回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：まとめ

第15回 1年のまとめ

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽 II

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験				授業内小テスト	
演習	2～	後期	1	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	0	100
				0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽 II は、弦管打楽器コース及びウインドシンフォニーコースの短大 2 年生以上が初めて室内楽を履修する年の後期開講の授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォーンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォーン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回 後期オリエンテーション

第2回 アンサンブル実習（様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する）

第3回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：基礎編

第4回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：応用編

第5回 アンサンブル実習（グラズノフ、リュエフ作品など）：より高度な実習

第6回 アンサンブル実習（演奏の正確さのみに終始せず、楽曲の構成などを理解し演奏できるよう学ぶ）

第7回 アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：基礎編

第8回 アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：応用編

第9回 アンサンブル実習（ビエルネ作品など）：より高度な実習

第10回 アンサンブル実習（総合的に高度な作品に取り掛かり、レベルの向上を目指す）

第11回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：基礎編

第12回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：応用編

第13回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：より高度な実習

第14回 アンサンブル実習（デザンクロ作品など）：まとめ

第15回 1年のまとめ

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必

ず持参してください。

■ **授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法**

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この“合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

基本的に同学年の学生同士でアンサンブルを組みますが、同時に履修登録していれば他の学年の学生と組んでも構いません。また、年度末には成果発表会を行います。

■ **教科書・参考書**

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅱ①

サクソフォンA

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
演習	3～	通年	2	評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

この授業は、弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が3年次から必修で学ぶ室内楽です。またその共演者となる指定された演奏家コース以外の学生も履修することができます（基本的には演奏家コースの学生でメンバーを構成します。学年の枠を超えて編成することを推奨します）。室内楽はアンサンブルの基本となる少人数の演奏形態ですが、1、2年次ですでに経験を重ねてきた履修者がさらに高度なアンサンブル技術を磨くことを学修の目標とします。技術面の向上はもとより、様式感、ハーモニーの捉え方、各パートがどのように全体に関わっているか等、室内楽の深く豊かな世界を探っていきます。サクソフォン室内楽の中心である“四重奏”を基本編成として、合わせや復習など学生が主体的に授業を進めていきます。

学修成果

高度なアンサンブルの技術、コミュニケーション能力を身につけ、アルト・サクソフォン以外の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていくことができます。作品や作曲者のバックグラウンドを知り、そのスタイルを知ることによって表現力の幅を広げることができます。4人が織りなすハーモニーの中で、演奏しても聴いても心地よい音程を探し、演奏することでソルフェージュ力を高めることができます。

授業展開と内容

第1回 前期オリエンテーション

第2回 アンサンブル実習（リヴィエ：グラヴェとプレストなど）：基礎編

第3回 アンサンブル実習（リヴィエ：グラヴェとプレストなど）：応用編

第4回 アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程の取り方や、和声感を意識した演奏をするために）

第5回 アンサンブル実習（長生：トルヴェールの惑星より“彗星”など）：基礎編

第6回 アンサンブル実習（長生：トルヴェールの惑星より“彗星”など）：応用編

第7回 アンサンブル実習（作品の背景や作曲者についてなど、音楽の総合的な理解を深める）

第8回 アンサンブル実習（デザンクロ：四重奏曲など）基礎編

第9回 アンサンブル実習（デザンクロ：四重奏曲など）応用編

第10回 アンサンブル実習（個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく）

第11回 アンサンブル実習（マスランカ：レシテーション・ブックなど）：基礎編

第12回 アンサンブル実習（マスランカ：レシテーション・ブックなど）：応用編

第13回 アンサンブル実習（シュミット：四重奏曲など）：基礎編

第14回 アンサンブル実習（シュミット：四重奏曲など）：基礎編

第15回 アンサンブル実習（前期のまとめ）

第16回 後期オリエンテーション

アンサンブル実習（バッハ：G線上のアリアなど）様々な時代や様式の作品に取り組み、それぞれのスタイルなどについて理解する

第17回 アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編

第18回 アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編

第19回 アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編

第20回 アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編および全曲のまとめ

第21回 アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編：弦楽アンサンブルの響きを研究する

第22回 アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編

第23回 アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編

第24回 アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編：演奏の正確さのみに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す

第25回 アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編：弦楽アンサンブルの響きを研究する

第26回 アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編

第27回 アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編

第28回 アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編：演奏の正確さのみに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す

第29回 アンサンブル実習（レパトリー研究）

履修上の注意

メンバーの組み方や選曲については担当教員と相談しながら決定してください。各グループのリーダーは担当教員と連絡を取り、事前に授業の進行を相談しておくこと。授業時には担当教員用のスコアを必ず用意しておくこと。演奏家コースとしての自覚を持ち、各団体が1つの個性的な演奏体として主体的な演奏表現ができるよう積極的に取り組んでください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この“あわせ”の時間も重要な学修の時間であるという意識を持ちましょう。また、年度末に成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅱ①

サクソフォンC

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
演習	3～	通年	2	評価割合	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

この授業は、弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が3年次から必修で学ぶ室内楽です。またその共演者となる指定された演奏家コース以外の学生も履修することができます（基本的には演奏家コースの学生でメンバーを構成します。学年の枠を超えて編成することを推奨します）。室内楽はアンサンブルの基本となる少人数の演奏形態ですが、1、2年次ですでに経験を重ねてきた履修者がさらに高度なアンサンブル技術を磨くことを学修の目標とします。技術面の向上はもとより、様式感、ハーモニーの捉え方、各パートがどのように全体に関わっているか等、室内楽の深く豊かな世界を探っていきます。サクソフォン室内楽の中心である“四重奏”を基本編成として、合わせや復習など学生が主体的に授業を進めていきます。

学修成果

高度なアンサンブルの技術、コミュニケーション能力を身につけ、アルト・サクソフォン以外の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていくことができます。作品や作曲者のバックグラウンドを知り、そのスタイルを知ることによって表現力の幅を広げることができます。4人が織りなすハーモニーの中で、演奏しても聴いても心地よい音程を探し、演奏することでソルフェージュ力を高めることができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（リヴィエ：グラヴェとプレストなど）：基礎編
第3回	アンサンブル実習（リヴィエ：グラヴェとプレストなど）：応用編
第4回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程の取り方や、和声感を意識した演奏をするために）
第5回	アンサンブル実習（長生：トルヴェールの惑星より“彗星”など）：基礎編
第6回	アンサンブル実習（長生：トルヴェールの惑星より“彗星”など）：応用編
第7回	アンサンブル実習（作品の背景や作曲者についてなど、音楽の総合的な理解を深める）
第8回	アンサンブル実習（デザンクロ：四重奏曲など）基礎編
第9回	アンサンブル実習（デザンクロ：四重奏曲など）応用編
第10回	アンサンブル実習（個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第11回	アンサンブル実習（マスランカ：レシテーション・ブックなど）：基礎編
第12回	アンサンブル実習（マスランカ：レシテーション・ブックなど）：応用編
第13回	アンサンブル実習（シュミット：四重奏曲など）：基礎編
第14回	アンサンブル実習（シュミット：四重奏曲など）：基礎編
第15回	アンサンブル実習（前期のまとめ）
第16回	後期オリエンテーション アンサンブル実習（バッハ：G線上のアリアなど）様々な時代や様式の作品に取り組み、それぞれのスタイルなどについて理解する
第17回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編
第18回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編
第19回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編
第20回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編および全曲のまとめ
第21回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編：弦楽アンサンブルの響きを研究する
第22回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編
第23回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編
第24回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編：演奏の正確さのみに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す
第25回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編：弦楽アンサンブルの響きを研究する
第26回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編
第27回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編
第28回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編：演奏の正確さのみに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す
第29回	アンサンブル実習（レパトリー研究）

履修上の注意

メンバーの組み方や選曲については担当教員と相談しながら決定してください。各グループのリーダーは担当教員と連絡を取り、事前に授業の進行を相談しておくこと。授業時には担当教員用のスコアを必ず用意しておくこと。演奏家コースとしての自覚を持ち、各団体が1つの個性的な演奏体として主体的な演奏表現ができるよう積極的に取り組んでください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この“あわせ”の時間も重要な学修の時間であるという意識を持ちましょう。また、年度末に成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽Ⅱ②

サクソフォンC

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
演習	4～	通年	2	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

この授業は、弦管打楽器演奏家Ⅰコースの学生が4年次に必修で学ぶ室内楽です。またその共演者となる指定された演奏家コース以外の学生も履修することができます（基本的には演奏家コースの学生でメンバーを構成します。学年の枠を超えて編成することを推奨します）。室内楽はアンサンブルの基本となる少人数の演奏形態ですが、これまでに室内楽経験を重ねてきた履修者がさらに高度なアンサンブル技術を磨くことを学修の目標とします。技術面の向上はもとより、様式感、ハーモニーの捉え方、各パートがどのように全体に関わっているか等、室内楽の深く豊かな世界を探っていきます。サクソフォン室内楽の中心である“四重奏”を基本編成として、合わせや復習など学生が主体的に授業を進めていきます。

学修成果

高度なアンサンブルの技術、コミュニケーション能力を身につけ、アルト・サクソフォン以外の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていくことができます。作品や作曲者のバックグラウンドを知り、そのスタイルを知ることによって表現力の幅を広げることができます。4人が織りなすハーモニーの中で、演奏しても聴いても心地よい音程を探し、演奏することでソルフェージュ力を高めることができます。

授業展開と内容

第1回	前期オリエンテーション
第2回	アンサンブル実習（リヴィエ：グラヴェとプレストなど）：基礎編
第3回	アンサンブル実習（リヴィエ：グラヴェとプレストなど）：応用編
第4回	アンサンブル実習（アンサンブルの中での音程の取り方や、和声感を意識した演奏をするために）
第5回	アンサンブル実習（長生：トルヴェールの惑星より“彗星”など）：基礎編
第6回	アンサンブル実習（長生：トルヴェールの惑星より“彗星”など）：応用編
第7回	アンサンブル実習（作品の背景や作曲者についてなど、音楽の総合的な理解を深める）
第8回	アンサンブル実習（デザンクロ：四重奏曲など）基礎編
第9回	アンサンブル実習（デザンクロ：四重奏曲など）応用編
第10回	アンサンブル実習（個々の楽器の特性を理解しながら作品をまとめていく）
第11回	アンサンブル実習（マスランカ：レシテーション・ブックなど）：基礎編
第12回	アンサンブル実習（マスランカ：レシテーション・ブックなど）：応用編
第13回	アンサンブル実習（シュミット：四重奏曲など）：基礎編
第14回	アンサンブル実習（シュミット：四重奏曲など）：基礎編
第15回	アンサンブル実習（前期のまとめ）
第16回	後期オリエンテーション アンサンブル実習（バッハ：G線上のアリアなど）様々な時代や様式の作品に取り組み、それぞれのスタイルなどについて理解する
第17回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編
第18回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編
第19回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編
第20回	アンサンブル実習（ベルノー：四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編および全曲のまとめ
第21回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編：弦楽アンサンブルの響きを研究する
第22回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編
第23回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編
第24回	アンサンブル実習（ラヴェル：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編：演奏の正確さのみに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す
第25回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：基礎編：弦楽アンサンブルの響きを研究する
第26回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第1、2楽章など）：応用編
第27回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：基礎編
第28回	アンサンブル実習（ドビュッシー：弦楽四重奏曲～第3、4楽章など）：応用編：演奏の正確さのみに終始せず、オリジナリティある演奏表現を目指す
第29回	アンサンブル実習（レパートリー研究）

履修上の注意

メンバーの組み方や選曲については担当教員と相談しながら決定してください。各グループのリーダーは担当教員と連絡を取り、事前に授業の進行を相談しておくこと。授業時には担当教員用のスコアを必ず用意しておくこと。演奏家コースとしての自覚を持ち、各団体が1つの個性的な演奏体として主体的な演奏表現ができるよう積極的に取り組んでください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この“あわせ”の時間も重要な学修の時間であるという意識を持ちましょう。また、年度末に成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽演習 II

サクソフォンA

曜日時限

水 4時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
演習	1～	後期	1	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽演習 II は、すでに履修を終えた"室内楽演習 I"を経て、さらに発展的に室内楽を学修する授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。合わせを進めていく中でコミュニケーション能力も身につけることができます。また、聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

第1回 オリエンテーション（各グループのメンバーや演奏曲などを決め、授業の進め方の説明などを行います）

第2回 アンサンブル実習（バハ：G線上のアリアなど）：様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する

第3回 アンサンブル実習（ブラネル：パーレスクなど）：基礎編

第4回 アンサンブル実習（ブラネル：パーレスク作品など）：応用編

第5回 アンサンブル実習アンサンブル実習（ブラネル：パーレスク作品など）：楽曲の構成などを理解する。和声の進行などを確認し、より良い演奏表現につなげる。

第6回 アンサンブル実習（グラズノフ：サクソフォン四重奏曲など）：基礎編

第7回 アンサンブル実習（グラズノフ：サクソフォン四重奏曲など）：応用編

第8回 アンサンブル実習（グラズノフ：サクソフォン四重奏曲など）：楽曲の構成などを理解する。和声の進行などを確認し、より良い演奏表現につなげる。

第9回 レパートリー研究（総合的に高度な作品に取り掛かりレベルの向上を目指す）

第10回 アンサンブル実習（ビエルネ：民謡風ロンドの主題による序奏と変奏など）：基礎編

第11回 アンサンブル実習（ビエルネ：民謡風ロンドの主題による序奏と変奏など）：応用編

第12回 アンサンブル実習（ビエルネ：民謡風ロンドの主題による序奏と変奏など）：編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく

第13回 アンサンブル実習（デザンクロ：サクソフォン四重奏曲など）：基礎編

第14回 アンサンブル実習（デザンクロ：サクソフォン四重奏曲など）：応用編

第15回 アンサンブル実習（デザンクロ：サクソフォン四重奏曲など）：編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく ー 前期のまとめ

第16回

第17回

第18回

第19回

第20回

第21回

第22回

第23回

第24回

第25回

第26回

第27回

第28回

第29回

第30回

■履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必ず持参してください。

■授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

また、年度末には成果発表会を行います。

■教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

室内楽演習 II

サクソフォンC

曜日時限

木 2時限

担当教員

彦坂 眞一郎

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
演習	1～	後期	1	0	0	0	100	0	100

教育到達目標と概要

室内楽演習 II は、すでに履修を終えた"室内楽演習 I"を経て、さらに発展的に室内楽を学修する授業です。室内楽はアンサンブルの基本となる比較的少人数による演奏形態であり、個々のパートには非常に高度な完成度が要求されます。大編成のオーケストラや吹奏楽とは異なる小編成のアンサンブルを数多く経験することは、技術の修得はもとより各自の音楽上の関わりかた、ハーモニーの捉え方、様式感などを理解する上で大変重要です。この授業では学生が主体的に室内楽団体を編成し、各グループ単位で授業を進めていきます。

学修成果

サクソフォンにおける室内楽の基本となる"クアルテット"の編成を中心に学修します。アルト・サクソフォン以外の楽器の特性も理解しながら作品をまとめていくことができます。合わせを進めていく中でコミュニケーション能力も身につけることができます。また、聴きながら音程やタイミングを合わせて演奏するといったアンサンブルへの対応力を身につける事ができます。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（各グループのメンバーや演奏曲などを決め、授業の進め方の説明などを行います）
- 第2回 アンサンブル実習（バハ：G線上のアリアなど）：様々な時代または性格の作品に取り組み、それぞれの時代様式などについて理解する
- 第3回 アンサンブル実習（ブラネル：パーレスクなど）：基礎編
- 第4回 アンサンブル実習（ブラネル：パーレスク作品など）：応用編
- 第5回 アンサンブル実習アンサンブル実習（ブラネル：パーレスク作品など）：楽曲の構成などを理解する。和声の進行などを確認し、より良い演奏表現につなげる。
- 第6回 アンサンブル実習（グラズノフ：サクソフォン四重奏曲など）：基礎編
- 第7回 アンサンブル実習（グラズノフ：サクソフォン四重奏曲など）：応用編
- 第8回 アンサンブル実習（グラズノフ：サクソフォン四重奏曲など）：楽曲の構成などを理解する。和声の進行などを確認し、より良い演奏表現につなげる。
- 第9回 レパートリー研究（総合的に高度な作品に取り掛かりレベルの向上を目指す）
- 第10回 アンサンブル実習（ビエルネ：民謡風ロンドの主題による序奏と変奏など）：基礎編
- 第11回 アンサンブル実習（ビエルネ：民謡風ロンドの主題による序奏と変奏など）：応用編
- 第12回 アンサンブル実習（ビエルネ：民謡風ロンドの主題による序奏と変奏など）：編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく
- 第13回 アンサンブル実習（デザンクロ：サクソフォン四重奏曲など）：基礎編
- 第14回 アンサンブル実習（デザンクロ：サクソフォン四重奏曲など）：応用編
- 第15回 アンサンブル実習（デザンクロ：サクソフォン四重奏曲など）：編成された楽器各々の特性を理解しながら作品をまとめていく ー 前期のまとめ
- 第16回
- 第17回
- 第18回
- 第19回
- 第20回
- 第21回
- 第22回
- 第23回
- 第24回
- 第25回
- 第26回
- 第27回
- 第28回
- 第29回
- 第30回

履修上の注意

メンバーが1人欠けてもアンサンブルは成立しません。無断で欠席することのないよう、また体調管理にも十分注意すること。メンバーの組み方及び選曲については担当教員の指示に従ってください。各グループのリーダーは担当教員と連絡をとり、事前に授業の進行を相談しておくこと。レッスン時には担当講師用のスコアを必ず持参してください。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

事前に、各グループ単位でスコアリーディングや合奏練習をおこなっておくこと（約60分、必要に応じてそれ以上）。この”合わせ”の時間も学修の時間であることを意識してください。

また、年度末には成果発表会を行います。

教科書・参考書

なし

科目名－クラス名

器楽 I ①**曜日時限****担当教員**

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
実技・実習	1～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

基礎的なテクニックや、音楽を学ぶものとしての取り組み方の基本を身につける事ができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	基礎的な練習の必要性ならびに練習の進め方についての演習
第3回	音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習1（基礎を中心に）
第4回	音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習2（上記の応用）
第5回	各自のレベルに合わせた教則本を取り上げ、その教則本が意図している目標を理解する
第6回	教則本の目標に沿って的確に演奏できているか、さらに強化すべきことは何かを学ぶ
第7回	個々の長所短所を理解し、訓練によって苦手を克服する
第8回	音階、教則本に加え、段階に応じて専攻楽器のための作品について取り上げる
第9回	音楽作品を演奏する際に大切な、取り組みの姿勢について学ぶ
第10回	楽器の音色、音質にこだわって演奏できているかを確認する
第11回	演奏を客観的に捉え、いい音程で演奏できているかを確認する
第12回	音楽作品を楽譜に忠実に演奏できているかを確認する
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲の楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	作品Bの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ①**曜日時限****担当教員**

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
実技・実習	1～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

基礎的なテクニックや、音楽を学ぶものとしての取り組み方の基本を身につける事ができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	基礎的な練習の必要性ならびに練習の進め方についての演習
第3回	音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習1（基礎を中心に）
第4回	音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習2（上記の応用）
第5回	各自のレベルに合わせた教則本を取り上げ、その教則本が意図している目標を理解する
第6回	教則本の目標に沿って的確に演奏できているか、さらに強化すべきことは何かを学ぶ
第7回	個々の長所短所を理解し、訓練によって苦手を克服する
第8回	音階、教則本に加え、段階に応じて専攻楽器のための作品について取り上げる
第9回	音楽作品を演奏する際に大切な、取り組みの姿勢について学ぶ
第10回	楽器の音色、音質にこだわって演奏できているかを確認する
第11回	演奏を客観的に捉え、いい音程で演奏できているかを確認する
第12回	音楽作品を楽譜に忠実に演奏できているかを確認する
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲の楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	作品Bの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ①**曜日時限****担当教員**

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	1～	通年	6	評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

基礎的なテクニックや、音楽を学ぶものとしての取り組み方の基本を身につける事ができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	基礎的な練習の必要性ならびに練習の進め方についての演習
第3回	音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習1（基礎を中心に）
第4回	音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習2（上記の応用）
第5回	各自のレベルに合わせた教則本を取り上げ、その教則本が意図している目標を理解する
第6回	教則本の目標に沿って的確に演奏できているか、さらに強化すべきことは何かを学ぶ
第7回	個々の長所短所を理解し、訓練によって苦手を克服する
第8回	音階、教則本に加え、段階に応じて専攻楽器のための作品について取り上げる
第9回	音楽作品を演奏する際に大切な、取り組みの姿勢について学ぶ
第10回	楽器の音色、音質にこだわって演奏できているかを確認する
第11回	演奏を客観的に捉え、いい音程で演奏できているかを確認する
第12回	音楽作品を楽譜に忠実に演奏できているかを確認する
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲の楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	作品Bの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	1～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

基礎的なテクニックや、音楽を学ぶものとしての取り組み方の基本を身につける事ができる。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
- 第2回 基礎的な練習の必要性ならびに練習の進め方についての演習
- 第3回 音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習1（基礎を中心に）
- 第4回 音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習2（上記の応用）
- 第5回 各自のレベルに合わせた教則本を取り上げ、その教則本が意図している目標を理解する
- 第6回 教則本の目標に沿って的確に演奏できているか、さらに強化すべきことは何かを学ぶ
- 第7回 個々の長所短所を理解し、訓練によって苦手を克服する
- 第8回 音階、教則本に加え、段階に応じて専攻楽器のための作品について取り上げる
- 第9回 音楽作品を演奏する際に大切な、取り組みの姿勢について学ぶ
- 第10回 楽器の音色、音質にこだわって演奏できているかを確認する
- 第11回 演奏を客観的に捉え、いい音程で演奏できているかを確認する
- 第12回 音楽作品を楽譜に忠実に演奏できているかを確認する
- 第13回 前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲の楽曲分析）
- 第14回 前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
- 第15回 前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
- 第16回 夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
- 第17回 作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第18回 作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第19回 作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第20回 作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第21回 作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第22回 作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第23回 作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第24回 作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第25回 作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第26回 作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第27回 作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第28回 作品Bの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第29回 後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
- 第30回 後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ①

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	1～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

基礎的なテクニックや、音楽を学ぶものとしての取り組み方の基本を身につける事ができる。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
- 第2回 基礎的な練習の必要性ならびに練習の進め方についての演習
- 第3回 音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習1（基礎を中心に）
- 第4回 音階などを用いた、専攻楽器演奏についての演習2（上記の応用）
- 第5回 各自のレベルに合わせた教則本を取り上げ、その教則本が意図している目標を理解する
- 第6回 教則本の目標に沿って的確に演奏できているか、さらに強化すべきことは何かを学ぶ
- 第7回 個々の長所短所を理解し、訓練によって苦手を克服する
- 第8回 音階、教則本に加え、段階に応じて専攻楽器のための作品について取り上げる
- 第9回 音楽作品を演奏する際に大切な、取り組みの姿勢について学ぶ
- 第10回 楽器の音色、音質にこだわって演奏できているかを確認する
- 第11回 演奏を客観的に捉え、いい音程で演奏できているかを確認する
- 第12回 音楽作品を楽譜に忠実に演奏できているかを確認する
- 第13回 前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲の楽曲分析）
- 第14回 前期実技試験に向けたレッスン（エチュード・課題曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
- 第15回 前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
- 第16回 夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
- 第17回 作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第18回 作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第19回 作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第20回 作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第21回 作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第22回 作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第23回 作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第24回 作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第25回 作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第26回 作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第27回 作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第28回 作品Bの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第29回 後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
- 第30回 後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽Ⅰ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験 授業内小テスト	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
実技・実習	2～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	テクニックを要する練習曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	テクニックを要する練習曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	テクニックを要する練習曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	テクニックを要する練習曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	テクニックを要する練習曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	テクニックを要する練習曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	オーソドックスな作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	オーソドックスな作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	オーソドックスな作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	オーソドックスな作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	オーソドックスな作品の表現についての演習（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	テクニックを要する作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	テクニックを要する作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	テクニックを要する作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	テクニックを要する作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	テクニックを要する作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	テクニックを要する作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	後期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	後期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	後期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	後期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	後期実技試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	後期実技試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
実技・実習	2～	通年	6	評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト
				評価割合	100	0	0	0	0

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	テクニックを要する練習曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	テクニックを要する練習曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	テクニックを要する練習曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	テクニックを要する練習曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	テクニックを要する練習曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	テクニックを要する練習曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	オーソドックスな作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	オーソドックスな作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	オーソドックスな作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	オーソドックスな作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	オーソドックスな作品の表現についての演習（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	テクニックを要する作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	テクニックを要する作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	テクニックを要する作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	テクニックを要する作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	テクニックを要する作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	テクニックを要する作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	卒業試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	卒業試験課題曲の最終仕上げ

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験 授業内小テスト	合計
				定期試験	筆記・実技	課題提出	作品提出		
実技・実習	2～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	テクニックを要する練習曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	テクニックを要する練習曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	テクニックを要する練習曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	テクニックを要する練習曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	テクニックを要する練習曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	テクニックを要する練習曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	オーソドックスな作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	オーソドックスな作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	オーソドックスな作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	オーソドックスな作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	オーソドックスな作品の表現についての演習（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	テクニックを要する作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	テクニックを要する作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	テクニックを要する作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	テクニックを要する作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	テクニックを要する作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	テクニックを要する作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	後期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	後期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	後期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	後期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	後期実技試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	後期実技試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価割合	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
- 第2回 テクニックを要する練習曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第3回 テクニックを要する練習曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第4回 テクニックを要する練習曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第5回 テクニックを要する練習曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第6回 テクニックを要する練習曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第7回 テクニックを要する練習曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第8回 オーソドックスな作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第9回 オーソドックスな作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第10回 オーソドックスな作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第11回 オーソドックスな作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第12回 オーソドックスな作品の表現についての演習（アイデアを音にする）
- 第13回 前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
- 第14回 前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
- 第15回 前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
- 第16回 夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
- 第17回 テクニックを要する作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第18回 テクニックを要する作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第19回 テクニックを要する作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第20回 テクニックを要する作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第21回 テクニックを要する作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第22回 テクニックを要する作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第23回 卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第24回 卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第25回 卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第26回 卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第27回 卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第28回 卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第29回 卒業試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
- 第30回 卒業試験課題曲の最終仕上げ

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	2～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
- 第2回 テクニックを要する練習曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第3回 テクニックを要する練習曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第4回 テクニックを要する練習曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第5回 テクニックを要する練習曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第6回 テクニックを要する練習曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第7回 テクニックを要する練習曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第8回 オーソドックスな作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第9回 オーソドックスな作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第10回 オーソドックスな作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第11回 オーソドックスな作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第12回 オーソドックスな作品の表現についての演習（アイデアを音にする）
- 第13回 前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
- 第14回 前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
- 第15回 前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
- 第16回 夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
- 第17回 テクニックを要する作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第18回 テクニックを要する作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第19回 テクニックを要する作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第20回 テクニックを要する作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第21回 テクニックを要する作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第22回 テクニックを要する作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第23回 卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第24回 卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第25回 卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第26回 卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第27回 卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第28回 卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第29回 卒業試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
- 第30回 卒業試験課題曲の最終仕上げ

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

■ 授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

■ 教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ④

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	4～	通年	6		100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。①～③で学修した内容をさらに発展させ、より高度で専門性を持った音楽人として成長ができる。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
- 第2回 協奏曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第3回 協奏曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第4回 協奏曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第5回 協奏曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第6回 協奏曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第7回 協奏曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第8回 前期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第9回 前期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第10回 前期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第11回 前期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第12回 前期実技試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第13回 前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
- 第14回 前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
- 第15回 前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
- 第16回 夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
- 第17回 独奏曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第18回 独奏曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第19回 独奏曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第20回 独奏曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第21回 独奏曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第22回 独奏曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第23回 卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第24回 卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第25回 卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第26回 卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第27回 卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第28回 卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第29回 卒業試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
- 第30回 卒業試験課題曲の最終仕上げと4年間のまとめ

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽 I ④

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法	定期試験				その他の試験	合計
					筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト	
実技・実習	4～	通年	6		100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

本科目は、各自の専攻実技を個人レッスン形式で学ぶものである。個々の力量に応じて、音階、教則本、音楽作品に取り組み、総合的演奏技術の向上を目指す。

学修成果

様々な楽曲に取り組むことにより、演奏家として、また、指導者としての能力を高めることができる。技術の修得のみならず、音楽の背景や作曲家についても学び、楽曲について深く理解した上で色彩感あふれる演奏をすることができるようになる。①～③で学修した内容をさらに発展させ、より高度で専門性を持った音楽人として成長ができる。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	協奏曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	協奏曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	協奏曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	協奏曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	協奏曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	協奏曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	前期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	前期実技試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	前期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	前期実技試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	前期実技試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	独奏曲の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	独奏曲の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	独奏曲の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	独奏曲の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	独奏曲の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	独奏曲の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	卒業試験で取り上げる作品の演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	卒業試験で取り上げる作品の解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	卒業試験で取り上げる作品の表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	卒業試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	卒業試験課題曲の最終仕上げと4年間のまとめ

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽実技Ⅰ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト				
実技・実習	2～	通年	6	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、弦管打楽器演奏家Ⅰコース・Ⅱコースの実技レッスンである。演奏家コース生としての目的意識を明確に持ち、専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現を身につける。

学修成果

専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現ができ、ソルフェージュ能力に裏付けされた演奏技術が身に付く。音楽理論、作品の歴史的背景や様式を理解し、演奏に反映させることができる。①で修得した技術や知識を応用し、アーティストとしての能力を総合的に高め感性豊かな表現能力が身に付く。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	作品Cの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	作品Cの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	作品Cの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	作品Cの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	作品Cの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	作品Cの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	作品Dの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	作品Dの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	作品Dの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	作品Dの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	作品Dの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	作品Dの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽実技Ⅰ②

曜日時限

実技

担当教員

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	定期試験				その他の試験	合計	
				評価方法	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表		授業内小テスト
実技・実習	2～	通年	6	評価方法	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、弦管打楽器演奏家Ⅰコース・Ⅱコースの実技レッスンである。演奏家コース生としての目的意識を明確に持ち、専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現を身につける。

学修成果

専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現ができ、ソルフェージュ能力に裏付けされた演奏技術が身に付く。音楽理論、作品の歴史的背景や様式を理解し、演奏に反映させることができる。①で修得した技術や知識を応用し、アーティストとしての能力を総合的に高め感性豊かな表現能力が身に付く。

授業展開と内容

- 第1回 オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
- 第2回 作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第3回 作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第4回 作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第5回 作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第6回 作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第7回 作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第8回 作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第9回 作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第10回 作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第11回 作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第12回 作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第13回 前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
- 第14回 前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
- 第15回 前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
- 第16回 夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
- 第17回 作品Cの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第18回 作品Cの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第19回 作品Cの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第20回 作品Cの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第21回 作品Cの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第22回 作品Cの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第23回 作品Dの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
- 第24回 作品Dの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
- 第25回 作品Dの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
- 第26回 作品Dの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
- 第27回 作品Dの表現についての演習1（アイデアを音にする）
- 第28回 作品Dの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
- 第29回 後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
- 第30回 後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽実技Ⅱ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計	
				評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出			成果発表
実技・実習	2～	通年	3	定期試験	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、弦管打楽器演奏家Ⅰコース・Ⅱコースのための主科実技レッスンであり、「器楽実技Ⅰ②」に付随したものである。演奏家コース生としての目的意識を明確に持ち、専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現を身につける。

学修成果

専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現ができ、ソルフェージュ能力に裏付けされた演奏技術が身に付く。音楽理論、作品の歴史的背景や様式を理解し、演奏に反映させることができる。①で修得した技術や知識を応用し、アーティストとしての能力を総合的に高め感性豊かな表現能力が身に付く。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	作品Cの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	作品Cの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	作品Cの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	作品Cの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	作品Cの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	作品Cの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	作品Dの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	作品Dの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	作品Dの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	作品Dの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	作品Dの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	作品Dの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

科目名－クラス名

器楽実技Ⅱ②

曜日時限

担当教員

実技

実技担当教員

授業形態	開講年次	開講期	単位数	評価方法				その他の試験	合計
				定期試験					
評価種別	筆記・実技	課題提出	作品提出	成果発表	授業内小テスト				
実技・実習	2～	通年	3	100	0	0	0	0	100

教育到達目標と概要

この科目は、弦管打楽器演奏家Ⅰコース・Ⅱコースのための主科実技レッスンであり、「器楽実技Ⅰ②」に付随したものである。演奏家コース生としての目的意識を明確に持ち、専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現を身につける。

学修成果

専攻する弦管打楽器について、プロフェッショナル奏者として国際的に活動するために必要な演奏表現ができ、ソルフェージュ能力に裏付けされた演奏技術が身に付く。音楽理論、作品の歴史的背景や様式を理解し、演奏に反映させることができる。①で修得した技術や知識を応用し、アーティストとしての能力を総合的に高め感性豊かな表現能力が身に付く。

授業展開と内容

第1回	オリエンテーション（1年間のレッスンの進め方や、練習方法などについて）
第2回	作品Aの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第3回	作品Aの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第4回	作品Aの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第5回	作品Aの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第6回	作品Aの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第7回	作品Aの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第8回	作品Bの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第9回	作品Bの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第10回	作品Bの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第11回	作品Bの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第12回	作品Bの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第13回	前期実技試験に向けたレッスン（楽曲分析）
第14回	前期実技試験に向けたレッスン（曲について理解を深め、演奏をより確実なものにする）
第15回	前期実技試験課題曲の最終仕上げと、夏休みの課題について
第16回	夏休み課題の成果確認と後期の目標設定
第17回	作品Cの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第18回	作品Cの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第19回	作品Cの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第20回	作品Cの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第21回	作品Cの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第22回	作品Cの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第23回	作品Dの演奏についての演習1（音の確認と演奏のポイント）
第24回	作品Dの演奏についての演習2（正確な楽譜の読み取り）
第25回	作品Dの解釈についての演習1（作曲背景などをもとに）
第26回	作品Dの解釈についての演習2（楽譜から読み取る）
第27回	作品Dの表現についての演習1（アイデアを音にする）
第28回	作品Dの表現についての演習2（様々な選択肢を考える）
第29回	後期実技試験に向けたレッスン（作品についての理解をより深め、演奏をより確実なものにする）
第30回	後期実技試験課題曲の最終仕上げと、春休みの課題について

履修上の注意

個人レッスンの形態では、指導者と学生のコミュニケーションが大切である。礼儀と節度を大切に、毎回のレッスンに臨むこと。無断で欠席したり遅刻しないこと。

授業外学修の指示／課題に対するフィードバックの方法

担当教員に指示された課題を次回レッスンまでに準備することは、個人実技レッスンの基本である。授業外の時間で練習の時間を確保し、予習と復習を必ずすること。

教科書・参考書

担当教員の指示に従うこと。

2022年度(後期・通年)「学生による授業評価アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード： 572 教員名：彦坂眞一郎

1) 評価結果に対する所見

実技個人レッスン、室内楽、合奏について。
室内楽、合奏の授業について、学生は満足しているようで安心した。
一方で、個人レッスンでは平均以下のポイントであった。

2) 要望への対応・改善方策

実技個人レッスン、室内楽、合奏の各授業はこのままの方針で問題ないと思う。
室内楽では、メンバー組をする際、学生のレベルの差が問題となっているが、複数の門下生が混在するため一人ずつの技量の差を認識することが難しい。他の担当教員と改善策を模索中。

また室内楽の授業では、毎回学生たちの準備不足が感じられたが、これはコロナの影響を受けた時期が長かったため、事前にどの程度準備すべきものかと言う認識がないためと考えられる。

個人レッスンについては、今回の結果になったことの原因を考えていくが、おそらく学生各自の到達度について、至らないとの自覚があるからであろうと感じる。

3) 今後の課題

学生たちは多くの時間を授業に取られており、特に放課後の時間が短いことは、演奏技術を上げるためには大きな障害となっていると感じる。サークル活動の時間も人間関係や役割分担など経験できることも多いが、そもそもアンサンブル能力の向上に役立つが、その時間も足りない。

また、年間取得単位数を制限するキャップ制は、できるだけ早期に卒業必要単位数を取得し、卒業へ向けて各自の練習時間を増やしていくということを不可能にしている。ラストスパートをかけることに制限がかけられているので、突出した才能が開花する可能性も制限されていると大いに感じ続けている。よってGPAと言う制度も、良いものとは思えない。

以 上